

被災地におけるトップアスリートによる 継続的スポーツ教室の効果

トップスポーツマネジメントコース
5011A320-9 長塚 智広

研究指導教員：平田 竹男 教授

I. 背景

2011年3月11日に発生した東日本大震災後、様々な支援活動が活発に行われている中で、「現役アスリートである自分にはどのような支援活動ができるのだろうか」と自問し、被災地の人々を応援する取り組みにしたいと考えた。トップアスリートの集団である、社団法人アスリートソサエティのメンバーとの議論を経て、出した結論の一つが「被災地の子どもを対象にした、アスリートソサエティ・トップアスリートスポーツ教室」(以下、部活指導)の定期的、継続的な開催である。部活指導を通じ 自らの能力に気づいたり、今まで出来なかった事ができる成功体験を積み重ねたりすることで“有能感(自分の能力に気が付く、達成する喜び)”が向上し、震災によって様々な困難に直面している子どもたちの心のケアに繋がると考えた。陸上競技のトップアスリートが定期的、継続的開催への協力をしてくれたことから、まず陸上競技部への部活指導を実施することになった。これまでの地震やテロによる子どもの心的外傷後ストレス障害(PTSD)について研究は、子どもと教員との関わりや学校生活に関する研究がほとんどで、高校生とトップアスリートを対象にした研究はない。また、トップアスリートが継続的に部活指導することの意義に関する研究もほとんどない。

II. 目的

本研究の目的は、東日本大震災後の被災地支援活動の一つとして福島県立相馬高校で行われた部活指導をモデルとして、トップアスリートが被災地の子どもたちに継続的に指導することによる、子どもおよびアスリート自身への影響を明らかにすることである。

III. 方法

部活指導に参加した高校生とトップアスリートを対象にアンケート調査を実施した。分析はアンケ

ートの各項目は開催前後の変化、および項目間の関連性について統計的解析を行った。自由筆記の内容およびインタビュー内容は質的分析の方法に沿い、記述内容をカテゴリー化した。

アンケート調査は、早稲田大学の人を対象とする研究に関する倫理審査委員会の承認を経て実施した。(承認番号:2011-108(1))

IV. 結果

2011年6月から12月までの期間に5回開催された。2回目以降からアンケート調査を実施した。表1に参加者と日程を示す。

表1 開催概要

開催回数	開催日	参加者(人)	
		高校生	アスリート
2	9月18日	13	4
3	10月30日	9	4
4	11月23日	11	5
5	12月18日	12	6

1) 高校生の変化

(1) 運動有能感の変化は、連続して3回以上出席した6人の最初と最後を比べた。上がった者は3名、下がった者は2名、変わらなかった者1名であった。下がった者はいずれも1ポイントであったが、上がった者は7ポイント、9ポイント1ポイントの上昇であった。

(2) トップアスリートに出会うことに対する感動の項目「トップアスリートが運動しているのを間近で見て、感動を覚えた」「トップアスリートと身近に触れて、その身体能力に、驚いた」「トップアスリートの精神力の強さに触れて、気持が高ぶった」は、どの開催回においても参加者全員が「よくあてはまる」か「ややあてはまる」と回答していた。

(3) 無力感に関する項目では、連続3回とも出席した6人の無力感に関する項目は、合計得点に変化なし1名、下がり続けた2名、下がって、上がった2名、3回目に下がった1名であった。

(4) 参加後のモチベーション変化、参加による目標の変化に関する項目では、「アスリートスポーツ教室への参加により新たな目標ができたか。」という問いに対して、毎回多くの生徒が新しい目標ができたかと答えていた。具体的目標については、3回目では、9名の回答した学生のうち1名が「東北大会出場」と書いていたが、4回目には11人中5人が「東北大会(以上の大会へ)出場」を記入し、5回目終了後には参加11名中4人が「東北大会への出場を」2名が「インターハイ、全国大会出場」と答えていた。また、3回目では、4回目ではそれぞれ1名ずつしか具体的な数字の目標を上げていなかったが、5回目には3名が具体的な目標値を設定していた。

(5) 満足度の項目「アスリート陸上教室に対して満足している」は、毎回全員が「よくあてはまる」もしくは「ややあてはまる」と回答した。

(6) 競技記録は全員が向上していた。しかしうち1名は9月に一度良くなったが、その後、記録が後退していた。記録の更新は、200mの選手で1秒15、400mの選手では5秒、3000m障害の選手では、1分13秒、5000mの選手では24秒の更新等であった。

(7) 自由筆記では、【トップ選手が目の前にいることへの感動】【選手との関係】【目標設定・意欲向上】【具体的・個別的な指導】【疑問の解決】に関する記述があった。

2) アスリートの変化

参加したアスリートの6名の自由記述やインタビューをまとめた。

(1) 高校生との関係性についてアスリートは「回数を重ねるごとに、自分たちへの信頼感が増していくのがわかる。」と表現し、回数追うごとに『笑顔が増える』ことや、表情や思ったことを隠さず『本音が言える』ようになってきたこと、会話がため口に変わる『口調の変化』、『学生からの言葉・反応』という【子どもたちの変化】に喜びを感じていた。

(2) 教員との関係性について参加したアスリートは、教員と『世間話ができる』『質問が来る』という教員との関わりを通じて【教員とのコミュニケーションの変化】を実感し『アスリートの指導の効果への気づき』を教員が表出したことにより、アスリートは「指導を任せてもらえる」という【指導への自信】を感じていた。

(3) アスリート自身の心理的变化は、一回目は達

成感が優先した『やり遂げた満足感』であったが、『2回目ぐっと近くなる』、3～4回目の満足はすごい高かったと表現されるように、回数を重ねるごと【満足感の変化】があった。さらに、アスリートは子どもたちが頑張る姿を目にすることで勇気づけられ『自分自身の強化への決意』や『自分自身の成長』への決意をあらたにし【新たな目標の確立】につながっていた。そして、開催後半には【トップアスリートとしての責任の再認識】していた。

(4) 競技面での変化では、参加した現役選手は、それぞれ「2012年ロンドンオリンピックに出場する」という目標を教室終了時に改めて宣言した。長塚智広(筆者)は、現役生活14年目にして初めて、G1レースの制覇を達成した。

V. 考察

参加した高校生やアスリートには競技成績だけでなく、モチベーションの向上などの心理的变化があった。このような変化は、まだまだ、想像を絶するような被害が残る6月の初回開催以降、地震や津波の被害、復興への不安を抱えながらも、高校生、アスリートが約半年間継続し、定期的に同じスポーツと一緒にすることから生まれた相互作用の結果と推察される。

本研究は陸上競技に限定した内容であるので、他の競技に応用するにはさらなる検討が必要である。しかしながら、運動有能感は児童から大学生までを対象に種々の研究がおこなわれていることから、他の年齢層の子どもに陸上競技のトップアスリートが繰り返し関わり、指導することについては、一定の効果が期待できると考える。

子どもの成長を助けることは、トップアスリートの社会的役割の一つとして考える。現役アスリートがこのような活動を継続することには、様々な困難があるが、本事例がここまでスムーズに進んでいるのは高校生の協力だけでなく、受け入れ先の高校教諭の全面的な協力が得られたこと、アスリートと高校側の橋渡しをしてくれた支援者の存在が大きかった。

本研究はアスリートと子供の相乗効果が様々な可能性を持つことを示めた。この研究をきっかけに、さらに多くのアスリートと子ども達が直接触れ合う機会が広まる事は、被災地の復興や日本の再生に役立つことが示唆される。